

# アメリカの演歌を聴け

「カントリーのアメリカ」票が動いた

さとうよしあき  
佐藤良明

東京大学大学院総合文化研究科教授

ヒラリー夫人とタミー・ワインネット

私たち日本人は、アメリカを先進国（少なくとも先行国）として見る構えがついているので、そんな「進んだ」国で、なぜブッシュのような人がリーダーに選ばれるのか、なかなか合点がない。アメリカ人であるということがどういふことか、日本人にはどうもわかりにくい仕組みになっているように、そのところを押し開いて説明したい。

まず、開国以来、日本人はみなおむね一本の歴史物語を生きてきたが、アメリカ人はそうではない。建国者の

子孫もいれば、最近の移民も多い。むかしの奴隷の子孫である異人種も何千万と住んでいる。しかし、アメリカをまっぴたつに分ける境界線がどこに引かれているのかというと、それは人種ではない。では何か。これがむずかしい。一つエピソードを挙げてみよう。

クリントン大統領の愛人スキャンダル騒ぎのさなか、ヒラリー夫人が全米向けのテレビ番組でこう言った。「私は《スタン・バイ・ユア・マン》してゐるわけじゃないの。タミー・ワインネットとは違います」。

タミー・ワインネットとはカントリー界のスター（故人）である。《スタン・バイ・ユア・マン》は、愛する男に尽くす女の辛抱と喜びを歌う1968年——「ウーマン・リブ」と呼ばれた女性解放運動に火がつきはじめたころ——のヒットソング。夫の危機で、「耐える女」を演じる側にまわってしまったヒラリーは、にもかかわらず自分が進歩派の指導者にふさわしい人物であることをわかりやすくアピールするために、往年のカントリーの名曲を引き合いに出したのだ。

しかし、どうだろう。もし日本に、次期首相の座を狙うインテリ議員がいたとして、彼女が「私は都はるみみたいな、女心の未練でセーターを編んで

しまふような女ではない」と国民に向かって言い切るだろうか？ それでは国民全体からブーイングを浴びてしまう。しかしヒラリーは、アメリカ版《ここに幸あり》というか、いまもカントリー局の「オールタイム・ベスト」の企画でナンバーワンに輝いたりする名曲を、意を決して足蹴にした。アメリカ国民が最初から二つに分断されているということを知らない者に、その行動は不可解である。

## アメリカのなかの勝ち組と負け組

アメリカは、《グローバルなアメリカ》と《土着のアメリカ》という対照的な二者からなっていて、前者はバブル時代の日本に負けられないおしゃれなライフをエンジョイしているが、内奥の小さな町に生まれ、東部の有名大学へ巣立っていく同級生を見送ってきた《土着アメリカ人》は、早くから負け組としてチープなアメリカを生きている。それらの人たちは、一つの共通の心情で結ばれている。その心情がなにより素直に表われるのが、カントリー・ミュージックなのだ。

ちよつと図式化がすぎたかもしれない。しかし、世界の中心をなす国で、勝ち負けの段差が激しく存在することは誰にも想像がつくことだ。（アメリカ

カ」とは、成功を手にした者が、その他大勢を置き去りにしてグローバルな活躍することで機能するシステムである。世界からどんな人を吸い込み、自由競争を演じさせて勝者をどんな上に押し上げる。しかし、同時にそこは、社会の階段を登りきれない大量の人間が、辺鄙な田舎や薄汚れた都会で、チープな衣食住生活を営む国でもあるのだ。

でありながら、階級分化が大きな問題にならないのは、〈アメリカン・ドリーム〉の神話が生きているからである。アメリカは自由平等、ちゃんとしたルールに乗れば、世界から誰でもやってこられるし、移民であっても運と努力次第で誰でもトップになれるのだと、その信仰がバネとなつているものだから、結果的にアメリカ人は、〈勝ち組〉と、未だに勝てないものの負け組を自認しない〈ナニクソ自分だつて組〉に二分されることになる。

で、どちらの勢力が優勢かという点、これは一概にはいえない。アメリカは一方で、高等教育のビジネスがすごい効率で進む国でもあるからだ。大学街でおしゃれな文化に接したあと、それなりの収入を得ている人は、田舎とは切れた暮らしをするだろう。広い土地だし、個人主義だし、故郷のことを思

う必要はない。一方、「故郷の人々」は独立独歩のプライドが高く、教育のあるものを嫌う傾向が強いから、両者の意識格差は開くばかりとなる。

### カントリーと昭和歌謡の相似性

話をカントリー音楽に戻そう。この業界は、ナッシュヴィルを総本山として、南部、中西部、西部山岳地帯を傘下に収め、都市部でも強みを発揮している。ミズーリ州の丘陵地帯にあるブルンソンという町では、40を越える数の劇場が軒を並べ、往年のスターのショーが毎晩繰り広げられるのだが、その町はバスツアーの行き先として、デイズニーワールドをしのぎ、現在全米ナンバーワンなのだそうだ。

ハットをかぶり、ギターやバンジョーやフィドルを抱え、あるいはド派手な髪型の女性歌手が特異な発声で歌をうたうこの業界が、実は日本の流行歌産業ときわめてよく似た成り立ちをしていると言ったら、みなさんは驚かれるだろうか。

ヒット曲のビジネスが日本で本格的にはじまったのは1927年のこと。この年、ビクターが東京に進出、全額出資の会社を作って、日本人向けのレコードビジネスを開始した。同じ年、ビクターと契約したスカウトマンが、

テネシー州でタレントショーを行ない、大きな才能を「発掘」した。カーター・ファミリーとジミー・ロジャース。創成期カントリーの大家である。後続スターの人氣も沸騰してレコードは売れまくり、ナッシュヴィルの巨大な鉄塔から発する電波も年を追うごとに大陸の奥地へ広がっていく。さらには「歌うカウボーイ」をフィーチャーした西部劇映画が大ヒット、1950年代までに「カントリー&ウエスタン」は、アメリカの「都市のポップス」に匹敵するほどの勢力へと成長した。

歌詞の内容が、さびしさ、郷愁、裏切り、強がりといった大衆の心情に傾いているところが昭和歌謡とよく似ている。アメリカの広大な大陸にちらばって暮らす人々の「さびしさ」というものは容易に想像がつくけれども、そういうジメジメとしたものはアメリカの立派な文学や芸術や、華々しいミュージカルの世界ではなかなか出会えない。ところがカントリーの名曲を見ると、こちらの世界はじつに「ロンサム」のオンパレードなのだ。ハンク・ウィリアムズの名曲で知られる「I'm So Lonesome I Could Cry」は、「遠くで汽笛が低く泣き」「流れ星が一瞬空を紫に染める」大陸の夜の、独り身の哀切を歌いきった歌だが、ネットショップを

さとう よしあき ●東京大学大学院人文科学研究科博士 課程中退。英語の授業改革に活躍する一方、現代アメリカの文学・文化・音楽を起点にした幅広い評論活動を展開している。著書に『J-POP進化論』『ラバーソウルの弾みかた：ビートルズと60年代文化のゆくえ』『郷愁としての昭和』などのほか、『ヴァインランド』（トマス・ピンチオン著）、『女中（メイド）の髻（オイド）』（ロバート・クーヴァー著）、『らりるれレノン』（ジョン・レノン著）などの翻訳がある



訪ねればわかるように、こんな救いような歌はないほど暗い歌に、いまでも無数のカバーバージョンが出ているのである。

### 歌の背後で重なり合う歴史体験

もちろん、カントリーといってもいろいろだ。その時代の都市のポップスの影響は吸い込んでいる。しかし、それは日本の歌謡曲とて同じこと。1970年代以降、歌謡曲もカントリーも、歩調を合わせてロックの方向へ順化した。1990年代、J-POPと呼ばれる名を変えた日本の業界からマルチミリオンセラーが量産されたころ、カントリー界も大きく膨張。ガース・ブルツクスの総売上げ枚数は、すでにプレスリーを抜き、ビートルズに迫っているという。

話のポイントはここのだ。——〈グローバル・アメリカ〉の音楽と対比してみると、東京から極東の島国に配信される音楽と、ナツシユヴィルから〈内地のアメリカ〉に向けて発信される音楽とは、かなりよく似た振舞いをしてきた。なぜだろう。それは、カントリーの住人と、歌謡曲の住人とが、どこかしら重なりある歴史体験をしてきたから、ではないだろうか。

われわれ日本人は、〈グローバル・パワー〉に脅されて開国し、文明開化、

和魂洋才、富国強兵、一億玉砕、高度成長、経済開放……といった言葉でつづられる近代史を生きてきた。列強に對抗し、戦い、ついに破綻し、生まれ変わってからはアメリカに追従しつつ繁栄へあずかかってきた、そんな民族の、強者へのあこがれと反発、「うつつり」と「やったぜ」と「てやんでえ」が昭和歌謡にはいっぱい詰まっているように、筆者には感じられる。いわば、国際パワーの中心から地理的・文化的に離れたところで、隠れたり巻き込まれたり、いろいろと様子を見つつ徐々に順化していった民族の思いが、昭和の歌に染みこんでいるのだ。

### 「カントリーのアメリカ」が選ぶ大統領

カントリー音楽に心をあずけてきたのは、ヨーロッパ辺境からの流れ者だ。アメリカに来ては浮かばれなかった人たち。そのなかには昔の内戦（南北戦争）に破れ、占領政策で「国」をいじり回された人たちの子孫も多い。有名な歌手のなかには、山中の炭坑で搾取されてきた貧民たちも多い。アメリカの歴史を、いわばつき回されながら生きてきた人々が、産業構造が変わった現在も、やはり十分な教育がないために、グローバル・パワーとしてのアメリカから疎外されている。（アメリカ

の夢）を抱きながら、はねつけられて

いる。その姿は、教育も企画力もあるのに英語がしゃべれずアメリカの中枢に入っていないかわれわれと、どこか重なり合わないこともない。いまはまだ重ならなくても、もつとグローバル化が進めば重なるかもしれない。

ヒラリー・クリントンばかり見てタミー・ワイネットを見なければ、アメリカを理解することはむずかしい。なぜブッシュのような「無教育」な人がリーダーに選ばれてしまうのか。それは「ネオコン」という特殊な人たちが暗躍しているからではない。アメリカにも「アメリカに生耳られている国民」のほうが数として多いというだけの話なのだ。

世界システムの中心を生きているということはそういうことなのだろう。大統領選の州別結果を描いた地図を覚えておられるだろうか。西の端と北東部（学問と先端ビジネスの中心）を除いた、「カントリーのアメリカ」の票がごっそりブッシュに入った。ヨーロッパで落ちこぼれ、アメリカでも浮かばれない大衆が、世界政治を動かす投票で勝利したという現実と、私たちは向き合っている。彼らをもっとよく知ることが必要だ。カントリーを聴こう。☺